

毎日新聞 朝刊 奈良版

2022年は奈良市の平城宮跡(約130畝)が国史跡となって100年。市井の人たちが始めた保存運動で歴史・学術的価値が広く認められるようになった。今後も発掘調査が進む予定で、専門家は将来の新たな発見に期待を寄せる。

要約

平城宮跡に築かれた大極殿(第二次)の土壇に明治34年(1901)標木が建てられた。地元・都跡村(当時)の有志が設けたものだ。都が京都に移った後、田畑になり多くの人は存在を忘れ、地元に伝承が残った。

県の技師関野貞が明治32年(1899)に遺跡を調査し新聞で発表すると顕彰の機運が高まった。溝辺文四郎は、運動を進めていた植木商の棚田嘉十郎と出会い、明治43年(1910)に遷都1200年記念祭を開催した。大正2年(1913)奈良大極殿址保存会設立。大正11年(1922)国史跡指定。戦後昭和28年(1953)駐屯していた米軍が宮跡を通る道路拡張し、柱穴などの遺構が見つかり国の調査が始まった。それまで平城宮の大極殿と考えられていたのは奈良時代後期に出来た第二次大極殿であり、前期の第一次大極殿はさらに西側にあったことを昭和53年(1978)に突き止め第一次大極殿発見となった。

一方、発掘調査は2021年時点で、総面積の4割近くしか終わっていない。今後も、役所があった東方官衙地区などの調査が進む予定で「地中にはまだまだ浪漫が詰まっている」と奈良文化財研究所の箱崎和久・都城発掘調査部長は語り新たな発見を期待する。



毎日新聞 朝刊 奈良版 令和4年12月27日の記事



第二次大極殿の土壇(写真中央)を撮影した明治41年(1906)ごろの写真

写真：奈良県名勝写真帖

奈良県立図書情報館今昔写真WEB蔵